

ロラード派をめぐる若干の問題 (1)

後 藤 真

はじめに

従来、ロラード派¹⁾の運動は、宗教改革史の中ではほとんど無視されるか²⁾、異端の一派として片付けられてきた。さらにその研究書に至っては、古くは W. H. サマズ³⁾、J. ゲアドナ⁴⁾、M. ディーンズリ⁵⁾、近年になっては K. B. マクファーリン⁶⁾、A. G. ディキンズ⁷⁾、J. A. F. トンプソン⁸⁾ 等の若干の著作を数えるだけである。このことは、従来、ロラード派の運動が、歴史家の興味を起す運動ではなかったことを示す。

ロラード派の運動が、歴史家によってこのような扱いを受けるようになった理由は、基本的には、彼らの宗教改革の史観に存すると思える。彼らは、ルターによって代表される大陸における宗教改革をステレオタイプ化して、英国における宗教改革を評価してきた。それゆえに、彼らが、英国宗教改革を「上からの改革」⁹⁾、「国家の行為」¹⁰⁾ とみなすことによって、大陸のそれから切り離し、宗教改革史の片隅に添え書きするようなことになった理由はそこにある。

宗教改革を巨視的に捉え、「『宗教改革運動は、国民国家主義の宗教的側面である』とか『その原因と結果において、宗教的であると全く同様政治的なものである』」¹¹⁾ とする歴史家の見解を否定するつもりはないし、それはそれとして評価に値する。しかしながら、宗教改革を一般化して、16世紀ヨーロッパ政治史の中に吸収させて理解してしまうことは、教理の改革という宗教改革の本質¹²⁾を見失うことになりはしないか。

確かに、英国における宗教改革は、いわば宗教改革のイデオログとしてのルター、カルヴァン、ツヴィングリのような人物を持たなかった。それゆえにまた、英国は、一人の宗教改革者をその創始者とする教派の成立を見なかった。確かに、英国宗教改革は、国内政治と国際政治の紛糾する中で、教会と国家はその影響を受け、国教会を成立させることになり、その結果、国家体制の推移による教会体制の変化 (Henrician Catholicism, Edwardian Protestantism, Marian

Catholicism, Elizabethan Anglicanism) を生むことになった。この現象だけを見るならば、英国宗教改革は、まさしく16世紀の絶対王権確立期における宗教改革の雛形ともいえる。しかしながら、英国においてはこういった諸現象から離れたところで、教理の改革の発展があったことを見過してはならない。

大陸における宗教改革は、その当初の担手である宗教改革者達による教理の改革運動が力ある運動として先行し、続いて反教皇主義的諸侯をそれに捲き込むことによって、あるいはこの機に乗じて、自国の教会を自身の監督下において君主権を確立伸展させようとする諸侯の支援の下にその運動を展開させていった。これに反して英国では、14世紀のウィクリフの改革が示すように、¹³⁾ 改革者達は、実質的な勢力をもつ反ローの運動としての宗教改革の直接の担手とはなり得ず、それゆえにまた、彼らの運動に国家を捲き込むこともなかった。

むしろ初期の段階においては激しい弾圧を受けたほどであり、国家の行為としての、あるいは政治的なローマとの決裂としての宗教改革だけが進展した。これだけを見るならば、先に述べた歴史家の評価は妥当であるように思える。しかしながら、この政治的に無力な改革者達が、英国宗教改革におけるプロテスタント的伝統を形成し継承していったのである。¹⁴⁾ これがロラード派の生き残りである。それゆえに、英国宗教改革を宗教改革 (教理の改革) ならしめたその担手である彼らの運動を等閑視するならば、英国宗教改革の本質的な部分を見過すことになる。

この小論では、宗教改革における教理の改革の担手となったロラード派に視座を据え、先ずその流れを概観してみたい。

1. ロラード派概観

ここでは、若干の方法が試みられ得る。

- a. 1382年の異端取締法令,¹⁵⁾ 1395年の12の結論,¹⁶⁾ 1401年の異端焚殺令¹⁷⁾

ワルドー派とアルビ派を排撃した第4回ラテラノ総会議(1215年)の教令が世俗権力に与えた異端絶滅の権威は英国,¹⁸⁾ においては、リチャードⅡ世の治世まで執行されたことはなかった。リチャードⅡ世の第5年すなわち1382年、この年にはウィクリフの24の結論¹⁹⁾が排斥されている。一方、貴族院(House of Lords)は、英国では初めての異端法令を、庶民院(House of Commons)を通さず、直接国王に提出し認可を受けた。この法令の内容は次のようである。

i) 教会当局の認可なしに、国中を経回って教会、墓地、市場、公共の場で、教会の教えに反した説教をする輩がいる。

ii) キリスト教信仰を損ない、法を破り、教会制度に反する、またそのことのゆえに、民衆の魂と全イングランドを危機に追いやる異端と誤謬に満ちた説教をする輩がいる。これについては、カンタベリ大司教、高位聖職者、神学博士、教会法学博士、法学博士、その他の聖職者によって十分に証明されている。

iii) これらの説教師達は、教会の勧告や命令に服従するどころか、かえってそれらを蔑視している。

iv) それゆえに、現議会は、大法官府(Chancery)において任命された州知事(Sheriff)、聖職者から成る特別委員会を組織し、教会の判断と法律に従って、この輩の身の証しが立つまで、彼らを逮捕し、監禁するように提案する。また国王は、大法官がこのような委員会を組織することを命ずる。

ここで云われているいわば不逞の輩がどのような流れを汲む者であったかについては研究を要する。それは、ロラード派の源流をどこに求めるかということに関わってくる。一般に、ロラード派はウィクリフの徒であるといわれているが、²⁰⁾ そのように単純に考えることはできない。1378年、大斎節中にランベス(Lambeth)の大司教礼拝堂(Archbishop's Chapel)で行なわれたウィクリフの裁判の告訴状「18の結論」²¹⁾も、1382年にコートニ(Courtenay)がブラックフライアズ(Black Friars)に召集した「地震会議」に提訴された「24の結論」²²⁾も、共にアカデミックな問題として扱われた。それゆえに、そこに見られるようなウィクリフの思想が、教会の認可を得ない説教師達によって、このように短期間のうちに、教会当局を震憾せしめ得るほどに広まり得たであろうか。1382年、当局が異端取締に目を向けたのは、レスタ(Leicester)で

あって、ウィクリフがいたラタワース(Lutterworth)ではなかった。²³⁾ 当時、彼はそこで著作に専念していたのであり、彼がそこから、いわゆる「貧しき説教師」(Poor Preachers)を派遣したという事実はない。

さらに、レスタで活動していたスウィンダービー(Swynderby)は、²⁴⁾ 平信徒の支持者を率いていたのであり、ウィクリフのグループから独立していたと考えられるべきである。とするならば、この不逞の輩には、二つの流れがあったと考えるのが至当と思える。

先の異端取締法令による教会当局の弾圧に対して、いわばイングランド教会を代表してローマ教会に対抗しているかに見える人々の抵抗が、英語によって書かれた²⁵⁾という「12の結論」によって示されている。この結論の内容は次のようである。

1) イングランド教会が、その継母であるローマ教会と同様、教会付属の不動産収入を追求しだしたことを非難する。

2) ローマに由来する聖職制度が、新約聖書にその根拠を求められないことを示す。

3) 聖職者の貞潔(Chastity)は、男色をもたらす。

4) 化体説は偶像礼拝をもたらす。

5) ブドウ酒、パン、水と油、塩、臘、香料、祭壇石、教会の壁、祭服、聖杯、司教冠、巡礼の杖に与えられる悪魔払いと祝福は、魔術的行為である。

6) 聖職者の世俗的権力の掌握を非難する。

7) 死者の靈魂のための特別の祈祷を土台として発展してきた修道院制度を非難する。

8) 盲目的な十字架、キリスト磔刑の像、耳の聞こえない木や石の像に対して捧げられる巡礼、祈祷、供物は、偶像礼拝に近いものである。

9) 秘密告解は、司祭と婦人の間に大罪をもたらしている。さらに「天国の鍵」は否定されるべきである。

10) 霊的な啓示なしに、正義の法という名のもとになされる殺人は、新約聖書に反している。

11) 病弱で体力の不完全な婦人達によってなされる貞潔の誓は、深刻で恐ろしい罪(墮胎、獣姦、同性愛等)の原因となっている。

12) 王国で営まれている不必要な技術に対する非難。最後に、別の書において、²⁶⁾ 彼らの見解が詳細に説かれていることに言及している。

先ずこの結論で注意すべきは、それが自国語、すなわち英語で起草されたことである。アカデミックな議論はラテン語でなされたという当時の慣習に従うなら

ば、これが英語で起草されたということは、彼らの運動が、民衆の運動として、すなわち平信徒の運動として既に定着、展開していたことを示唆する。

第二に、反教皇主義が影を潜め、倫理を中心にした反聖職者主義に傾斜していること、さらに、聖餐論（化体説）への言及が柔弱であることが指摘できる。それゆえに、この結論を起草したグループと、ウィクリフとその弟子達とのアカデミックなグループとの間に中断のあったことを認めざるを得ない。

英国における異端迫害は、ヘンリⅣ世の治世（1399～1413）の De Heretico Comburendo において公式に開始する。この法令は、ヘンリⅤ世のもと（1413～1422）で数多くの異端狩りを生み、ヘンリⅧ世のもと（1509～1547）で廃棄され、メアリⅠ世の時期（1553～1558）に復活し、エリザベスⅠ世の治世に再び廃棄された曰く付きの法令である。

先ずこの法令の前文にあたる部分は、当時の状況を次のように説明している。

i) 新しい分派の誤った連中は、教会のサクラメントと教会の権威について新しい考え方をもち、神と教会の法に反する説教をし、各地で、新しい教理や、教会の信仰と決定に反した教説を公けにまた密かに説き、教えている。

ii) 彼らは、非合法の秘密集会や徒党を組み、学校を開き、書物を著わし、民衆を教育して騒擾と反乱にかり立て、民衆の間に争いと分裂を生ぜしめ、日々、無法を行なっている。

iii) 彼らが一つの司教管区から他の司教管区へと移動するため、国王の援助なしには、司教の管轄権が、彼らに十分及ばない。

iv) それゆえ、高位聖職者、牧師、並びに庶民院は、彼らに対する処置を国王に願い出た。

その結果、以下のことが制定された。

i) いかなる者も、司教の認可なしに、公けにまた密かに説教をしてはならない。但し、既に牧師である者、特権を与えられている者、教会法が認可している者を除く。

ii) いかなる者も、公けにまた密かに、カトリック信仰、聖なる教会の決定に反する事柄を説き、主張し、教え、伝え、書物に著わしてはならない。

iii) このような分派、邪悪な教理、見解をもつ者は、いかなる者も、秘密集会を結成したり、学校を経営したりしてはならない。

iv) 上記のような連中を、いかなる点においても擁

護したり、支持してはならない。

v) 彼らの書物や文書を所有する者は、この法令の布告後40日以内に、それらを管区司教に届け出ること、また届けさせること。

vi) この法令に反する者は、管区司教がこれを逮捕し、法令に定められた条項に照らして無罪が判明するまで、もしくは教会法に従ってその信仰を放棄するまで拘留することができる。

vii) 容疑者に対する訴訟手続は、公開の裁判により、3ヶ月以内に終了すること。容疑者が有罪と認められた場合は、管区司教もしくはその代理人が、相当期間彼らを投獄し、罰金を課することができる。

viii) 有罪と認められた者が、その信仰を放棄せず、または放棄後も同じ罪を犯す場合は、彼らの身柄は世俗裁判所に移管される。

ix) 市長 (mayors)、州知事、荘官 (bailiffs) は、管区司教、またはその代理人の要請に応じて裁判に臨席し、判決後、被告の身柄を引きとり、公衆の面前で彼らを火刑に処さなければならない。

先ず、この法令と、1382年の異端取締法令とを比較して注目すべきことは、この法令が庶民院によって提案されていること、最終審が世俗裁判所に移管されていることである。このことは、前文にも示されているように、彼らの運動が単に教会内の問題に留まらず、国家治安上の問題にまで発展していたことを示唆する。さらに、教会当局にとっては、アカデミックな運動も平信徒による民衆運動も、区別なく、反教会運動として扱われているということである。

ここで言及されている彼らの教理が何であったか、あるいは彼らの具体的な運動内容がいかなるものであったかについては、彼らの裁判記録によって検証し、改めて、アカデミックなグループと平信徒グループとの比較を試みることにする。

(続く)

註

- 1) 「ロラード」 (Lollards, Lollardy) という呼称が、16世紀以前の異端者に向けられた用語であることには間違いはないが、その語源に至っては定説はない。i) 中世オランダ語の「lollaerd」(もぐもぐ言う奴、ぶつぶつ言う奴の意)、ii) ラテン語の「lollium」(毒麦の意)、にその語源を求め二説がある。

前者について云えば、この用語は、12世紀オランダに創立された女子修道会ベギン会を模して13世紀フランダースに起った男子ベギン会修道士 (flemish Beghards) に与えられた呼称であり、

後に神秘主義思想、異端信仰をもつ大陸の異端グループの総称として用いられるようになったという。さらに英国においては、アイルランド人シトー修道会士ヘンリ・クランプ (Henry Crump) によって、1382年初頭、ウィクリフの教説を弾劾する説教の中で、ウィクリフの追随者達について用いられ、公用語としては、1387年、ウスタの司教ヘンリ・ウェイクフィールド (Henry Wakefield) が5人の異端者に対する令状の中で用い、それ以後、一般に用いられるようになったといわれる (*Encyclopaedia Britannica*, 1963, Lollardsの項参照)。しかしながら、ホウィトニ (Whitney, J. P.) は後者をとる (*A Dictionary of English Church History*, 1919, Lollardy 項参照)。尚、後者をとるものとして、Capes, W. W., *The English Church in the Fourteenth and Fifteenth Centuries*, AMS Press, 1900, p. 179。

さらにルプは、「ロラード」の異称として「known-man」、もしくは「just fast man」なる語のあったことを、フォクス (Foxe, John, *The Acts and Monuments*, AMS Press, 1965, Vol. IV, p. 243) とピーコック (Pecock, Reginald, *Repressor of the Clergy*/Rolls Series, 19/Vol. I, p. 53) に従って指摘している (Rupp, E. G., *Studies in the Making of the English Protestant Tradition*, Cambridge, 1947, 1966, p. 1n.)。

- 2) 因みに、邦語唯一の『イギリス宗教改革の歴史』(半田元夫, 小峯書店, 1967) は、ロラード派に関して唯の一行も割いていない。
- 3) Summers, W. H., *Our Lollard Ancestors*, 1904, 絶版。
- 4) Gairdner, J., *Lollardy and the Reformation*, Burt Franklin, 1908, Vol. 1.
- 5) Deanesly, M., *The Lollard Bible*, Cambridge, 1920, 1966, これは中世英訳聖書の特殊研究である。
- 6) McFarlen, K. B., *John Wycliffe and the Beginnings of English Nonconformity*, The English Universities Press, 1952, 1972.
- 7) Dickens, A. G., *Lollards and Protestants in the Diocese of York, 1509~1558*, Oxford, 1959.
- 8) Thomson, John A. F., *The Later Lollards, 1414~1520*, Oxford, 1965, これは著者の PH. D. の論文であり、地方史の詳細な研究から成っている。
- 9) 大野真弓編, 『イギリス史』, 山川出版社, 1973, p. 128
- 10) Powicke, M., *The Reformation in England*, Oxford, 1941, 1973, p. 1
- 11) 半田元夫, 上掲書, p. ii
- 12) 小平尚道, 『プロテスタンティズムの本質』, 日本YMCA同盟出版部, 1965, pp. 57~66参照。
- 13) ディキンズは、ルター以前に既にウィクリフが、信仰義認を除く他の主要な16世紀の教理を主唱したことを指摘している。にもかかわらず運動とし

ては成功せず、その思想がフスに継承されたということとは周知の如くである。Dickens, A. G., *The English Reformation*, Schocken Books, 1964, pp. 22~23

- 14) この意味において、ディキンズやルプの研究が英国宗教改革史研究に与えた新しい視点は、高く評価されるべきである。

ディキンズについては、註12の著作。ルプについては、註1の著作。

- 15) *A Private Statute made by the Clergy, without Consent or Knowledge of the Commons*, 1382年5月26日. *Statutes*, Vol. ii, p. 25.

Cotton による要約の英訳本文が, Foxe, op. cit., Vol. III. p. 37 にある。さらに, Burnet, G., *The History of the Reformation of the Church of England*, Oxford, 1865, 1969, Vol. I, pp. 58-59; Gairdner, op. cit., p. 18 を見よ。

- 16) *The Twelve Conclusions of the Lollards*, ラテン語本文は, Fasciculi Zizaniorum, pp. 360-369. これの英訳が, Foxe, op. cit., pp. 203-206. クロウニン (Cronin, H. S., *The Twelve Conclusions of the Lollards*, English Historical Review, Vol. 22, 1907, pp. 292f.) に従えば, これは元来英語で起草されたものであるという。英語本文は, pp. 295f.

Gee, H. and Hardy, W. J., *Documents Illustrative of English Church History*, London, 1896 からの邦訳が, ヘンリー・ベッテンソン編, 『キリスト教文書資料集』, 聖書図書刊行会, 1962, pp. 256-262 にある。その他に, Gairdner, op. cit., pp. 44-46

- 17) *De Heretico Comburendo*, 1401. *Statutes*, Vol. ii, p. 126.

Gee and Hardy からの重訳が, 『キリスト教文書資料集』, pp. 262-265。その他に, Burnet, op. cit., pp. 59-60; Gairdner, op. cit., p. 48

- 18) 「3 . . . 有罪を宣告された異端者は, それに相応する罰を受けるために, 世俗の高官もしくは彼らの代理者に引き渡される. . . . もし世俗の君主が, 彼の領地からこの異端の汚れを追放せよという教会の命令を行なうのを怠るなら, 彼は大司教とその地域の他の司教たちによって, 破門されるものとする. . . .」(『キリスト教文書資料集』, pp. 200-201)

- 19) 本文は, Foxe, op. cit., Vol. III. pp. 21-22; *The Dictionary of National Biography*, Oxford, 1968, Vol. XXI, pp. 1128-1129; 『キリスト教文書資料集』, pp. 255-256 には抜萃邦訳がある。

これは異端10箇条, 誤謬14箇条から成る。1—3; 化体説の否定, 4; 聖職者の聖餐執行権の否定, 5; 形式的告解の無効, 6; ミサの根拠の否定, 7; 「神は悪魔に従うべきである」という逆説, 8—9; 不適格者である教皇の否認, 10; 聖職者の世俗財産所有の根拠の否定 (以上異端10箇条)。11—14; 破門に対する反対, 15; 御言葉を説くことの正当性, 16; 世俗の支配者, 聖職者の

否認, 17; 教会財産没収の必要性, 18; 十分の一税への反対, 19; 祈祷の効果, 20—22; 修道会の不当性, 23—24; 托鉢修道士の托鉢の禁止 (以上誤謬14箇条)。

- 20) これについては、枚挙に遑がない。次の二つを挙げるだけで十分であろう。「ウィクリフにならい、個人的信仰, 神の選り, 聖書を重んじた一派」(『キリスト教大事典』, 教文館, 1963, ロラード派の項)。“... a name given to holders of certain religious tenets deriving from the teachings of John Wycliffe” (Britanica, *ibid.*).
- 21) ラテン語本文は, Wilkins, iii, 123. 英訳は, Foxe, *op. cit.*, p. 11—12. 1—4; 教皇権の否定, 5—6; 世俗支配権の容認, 7; 恩寵による救い, 8—11; 破門に対する反対, 12; 教会の世俗財産所有の否定, 13—14; 天国の鍵の誤解, 15;

聖職者の聖餐執行の権限, 16—18; 世俗支配権の優位性。この結論の中心は, i. ブラドウォーディーン (Bradwardine, Thomas, 1290?—1349) の恩寵の予定説の継承・発展, ii. 中世の教会の世俗性に対する決定的な反発である。

22) 註. 19参照。

23) McFarlane, *op. cit.*, p. 107.

24) McFarlane, *ibid.*

彼の生涯は不明である。Gairdner, *op. cit.*, pp. 28f. 参照。

25) 詳細は, 註. 16のクロウニンの論文。

26) コンプトンに従えば, 1383年頃に出された「37の結論」を指すと思われる。詳細は, Compton, H. F. B., *The Thirty-Seven Conclusions of the Lollards*, *English Historical Review*, Vol. 26 (1911), pp. 738f.